

特集

Thematic Exhibition Tibetan Esoteric Buddhism and Its Sculpture

Room 12 of the Toyokan, Tokyo National Museum Tuesday, September 5 – Sunday, October 15, 2017

チベットの仏像と 密教の世界

東京国立博物館
東洋館12室

2017年 9月 5日(火)
～10月15日(日)

チベット仏教は、インド仏教を継承しながら、独自の発展を遂げました。なかでも密教は呪術性が強く、儀礼を重視することが知られます。そのため、教えと結びついた複雑な神仏の造形と体系が生み出されました。たとえば、インドの神々に由来する複数の顔や手をもつ異形の姿や、鳥獣や骸骨といった日本ではなじみの薄いモチーフが多用されます。このような、拝する者が圧倒される造形美こそ、チベット仏教で信仰される仏像の特色といえましょう。

隣接するモンゴルや中国にもその影響は及びました。とりわけ、元や清といった王朝におけるチベット

仏教への信仰は篤く、ネパールやチベットから僧や職人が当時の首都（現在の北京）に招かれ、チベット仏教寺院の建造が相次ぎ、仏像も数多く制作されました。チベットの仏像は、中国の皇帝をも魅了してきたのです。

東京国立博物館では、チベットで制作された仏像に加え、清時代（17～19世紀）に造られた北京周辺の遺品を多数所蔵しています。本特集は、なかでも特色ある作品を選び、その豊かな信仰世界を初めてひろく紹介するものです。ヒマラヤの高原に花開き、東アジアにも浸透したチベット仏教の神秘的な「かたち」をご覧ください。ぜひ幸いです。



ぼきつぎざう
1 菩薩坐像

Seated Bodhisattva

銅造、鍍金 中国・チベットまたはネパール
15～16世紀 総高17.4cm TC-1

Although Tibetan Buddhism drew heavily on Indian Buddhism, it also developed in highly unique ways. Tibetan Esoteric Buddhism, in particular, took on a more magical and ceremonial character, leading to the development of more complex artistic forms and pantheons of deities. Figures with multiple faces and arms, as inspired by Indian gods, as well as skeletons and other distinctive images were incorporated on a large scale, and no doubt astonished multitudes of believers. Tibetan

Buddhism also reached nearby Mongolia and China, finding particularly strong followings in the Yuan (1271–1368) and Qing (1636–1912) dynasties.

The Tokyo National Museum collection includes Tibetan Buddhist sculptures as well as numerous related objects created around Beijing in the Qing dynasty. From among these, the most distinctive artworks have been selected for this Thematic Exhibition in order to explore the rich world of Tibetan Buddhism and its influences.

仏・仏母

仏(如来)とは悟りを開いた存在で、歴史上の人物であるゴータマ・ブッダ(釈迦)がイメージのモデルとなっています。仏には出家を意味する袈裟を身につけた姿と、仏の王として着飾った姿(No.2)の2種類があります。日本ではなじみがありませんが、仏母と呼ばれる女性の仏(No.3)もいました。

守護尊



2 無量寿仏坐像
Seated Amitayus
銅造、鍍金 中国 清時代・17~18世紀 総高31.2cm TC-62



3 仏頂尊勝母坐像
Seated Ushnisavijaya
銅造、鍍金 中国 清時代・17~18世紀 総高39.2cm TC-274



6 ヴァジュラバイラヴァ父母仏立像
Standing Vajrabhairava with Consort
銅造、鍍金 中国 清時代・17~18世紀 総高17.6cm TC-723 東ふさ子氏寄贈

菩薩

菩薩には「悟りを開くことが予定された者」という意味があり、そのモデルは悟りを開く前のゴータマ・ブッダです。装身具をつけた若者の姿で表わされますが、インドの神々の姿を取り入れ、十一面観音菩薩(No.4)など複数の顔や手をもつ菩薩も人びとの信仰を集めました。



4 八臂十一面観音菩薩立像
Standing Eight-armed Ekadasamukha
銅造、鍍金 中国 清時代・17~18世紀 総高51.5cm TC-271



5 馬頭尊立像
Standing Hayagriva
銅造、鍍金 中国 清時代・18~19世紀 総高19.5cm TC-293

護法尊

インドのヒンドゥー教や、チベットの民族宗教であるボン教の神々も仏教に取り入れられ、財宝神や守護神として信仰されました。たとえば四天王や十方天は、インドでは各方位を司る一般的な守護神です。寺院を護るマハーカラには、象の皮を広げた恐ろしい姿(No.10背面)にバイラヴァと呼ばれるシヴァ神の畏怖相であった名残がうかがえます。



8 四天王立像
増長天、広目天、多聞天、持国天

Four Heavenly Generals
Virudhaka, Virupaksa, Vairavana, Dhrtarstra
銅造、鍍金 中国 清時代・18~19世紀 総高22.0~22.5cm TC-324~327



9 十方天像のうち
火天、焰魔天、地天女、帝釈天、梵天、水天、伊舎那天

Devas of the Ten Directions
Agni, Yama, Prthivi, Indra, Brahma, Varuna, Isana
銅造、鍍金 中国 清時代・18~19世紀 総高12.5~12.8cm TC-296~298, 300, 301, 307, 317



の仏たち

日本では明王として知られる、恐ろしい形相で手に武器を持つ仏は、チベットでは忿怒尊に相当します。なかでも密教経典の本尊として説かれるものは守護尊（イダム）と呼ばれ、文字どおり「守り神」として信仰を集めました。

マジカルな
仏像

父母仏 —仏を生み出すかたち

男女が抱擁する姿の仏像を父母仏（ヤブユム）と呼びます。インドにおける女神信仰の高まりを受け、仏菩薩に配偶者を考え出したことから、父母仏が造られるようになりました。密教経典の本尊として説かれる守護尊が、その妃と交わることで曼荼羅の世界を構成する仏たちを生み出すと考えられていました。

顔や手足が多い

仏像に複数の顔や手足がある表現は、その視野に死角がなく、さまざまな性格をもつことの象徴です。水牛の頭など、力強い動物にあやかる姿も見どころです。

数々の法具や 生首・髑髏

金剛杵や肉切り包丁（カルトリ刀）といった法具、生首や髑髏のネックレスなど、奇怪な持ち物も特徴の一つです。



10 六臂マハーカーラ立像

Standing Six-armed Mahakala

銅造、鍍金 中国 清時代・17～18世紀 総高37.2cm TC-370



(背面)

踏みつけられる 異教の神々

足元には、煩惱や災厄を象徴すると考えられていた神々の姿がみえます。異教に対抗すべく、仏教徒の知恵が生み出した造形です。



7 チャクラサンヴァラ父母仏立像

Standing Cakrasamvara with Consort

銅造、鍍金 中国・チベットまたはネパール

15～16世紀 総高29.4cm

TC-192 服部七兵衛氏寄贈

ブッダも公認 —— 栴檀瑞像

ブッダの在世中、初めて作られた仏像と伝説に記される、赤栴檀製の仏像の写し。銅製や木製など数多くの模刻が残り、チベットや中国でも盛んに信仰されました。日本では京都・清凉寺の像が有名ですが、笑みを浮かべ、両肩を覆う袈裟に同心円状の襷を表わす姿が特徴です。



11 釈迦如来立像 (栴檀瑞像)
Standing Sakyamuni
木造、漆箔、漆塗
中国 清時代・18～19世紀
総高33.5cm TC-208

チベット仏教と僧侶

複雑な教えの理解や、儀礼の継承が必要とされるチベット仏教では、宗派の開祖や祖師を重視します。ラマと呼ばれる師匠の姿は絵画や彫像として信仰の対象となり、後世ラマ教と俗称される背景ともなりました。ラマは仏菩薩の化身とされ、両手に持つ蓮華に、剣や経典など、その象徴を載せるのが一般的です。



12 ツォンカバ坐像
Seated Tsongkhapa
銅造、鍍金 中国 清時代・17～18世紀 総高29.5cm TC-205

中国の皇帝も夢中—— 乾隆帝の仏像



13 明月母坐像
Seated Sasin
銅造、鍍金 中国 清時代・18世紀 総高19.5cm TC-276



14 除蓋障菩薩坐像
Seated Sarvanivaranaviskambhin
銅造、鍍金 中国 清時代・18世紀 総高38.7cm TC-269



15 巴呷沙雜扎天坐像
Seated Vrsika
銅造、鍍金 中国 清時代・18世紀 総高19.4cm TC-278

いずれも台座正面に「大清乾隆年敬造」とあり、清の第6代乾隆帝（在位1735～95）が造らせたものとわかります。乾隆帝はチベット仏教への信仰が篤く、母の長寿を祝して紫禁城内や避暑地の承德に六品仏楼と呼ばれる8か所の寺院を建立しました。これらの仏像も、そのうちのいずれかに奉納された、786体に及ぶ仏像で構成される立体曼荼羅の一部だったと考えられます。



【謝辞】 本特集においては、田中公明氏（公益財団法人中村元東方研究所）に貴重なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

【表紙写真】 サムエ寺（猪熊兼樹撮影）